島根の記憶

③

カルシュ、その人（2）

松江で心の平安発見

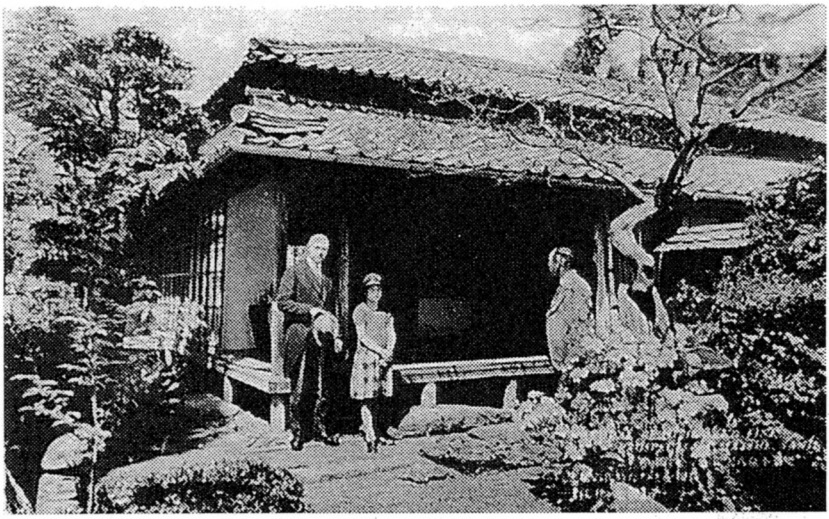
カルシュが最初に日本と出合ったのは、一九一一年のドレスデンでの国際博覧会だった。関東大震災の前、日本の高等学校への誘いがあったが、募集は見送られた。その後、進言もあって、旧制松江高のドイツ語講師の道を選んだ。

ひと月半に及ぶ航海の末、神戸港に着いたカルシュ夫妻は見知らぬ国で不安と期待で一杯だった。それでも何とか二五年九月二十八日、あこがれの松江に着き、奥谷町の官舎に入力車で早速向かい、入居した。

官舎は、外国人講師のために建てられた小さな洋館で、新任夫妻の居と定められていた。妻エンメラは、異国で頼り合う愛を確かめるように夫の傍らに身を寄せた。

これが日本での第一歩だった。その後、もろもろの人々との不思議な縁が待っていた。一か月ほどたって周りが少しずつ分かり、落ち着いてくると、少しずつ動き出した。

小泉八雲旧居をよく訪れたという（若松教授提供）



日曜日は散歩に出かける。官舎近くは静かなところだ。不思議なくらい不安が消える。どうやら心の静けさを感じさせる何かがあるようだ。神々の住む出雲地方のことは、ラフカディオ・ハーンの書からよく知っていたつもりだった。

「自分の心は神々と生徒たちとありたいものだ」

カルシュは来日以来、日本の社会や自然の中に、限りない落ち着きを感じた。一見、混然としたたたずまいに不思議な秩序があり、自然の中にヨーロッパにない調和の美を見いだした。心が安らぐ日々。積極的に地元の人々と交流し、かつて経験したことのない雰囲気を吸収しようとした。

ハーンの住んでいた家を何度も一人で訪ねたという。ハーンの影響を受けて来日したカルシュにとって、日本との最初の接点を与えてくれたという意味で感慨深かっただろう。長女メヒテルトも何度も父と訪ねたという。今も変わらぬ雰囲気とたたずまい。メヒテルトの、現在に連なる感性を培った日本の心と息づかいを感じる所である。

（東京医科歯科大大学院教授　若松　秀俊）